

2月10日

国 語

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 問題は□から□です。確認後、問題冊子の表紙と解答用紙に、「受験番号」「氏名」を記入すること。
3. 試験中は試験監督の指示に従うこと。
4. 問題冊子の余白は自由に書き込んで構わない。ただし、答えは解答用紙に記入すること。
5. 「、」「。」は一字とする。

受験番号		氏 名	
------	--	-----	--

一 漢字に関する次の問に答えなさい。

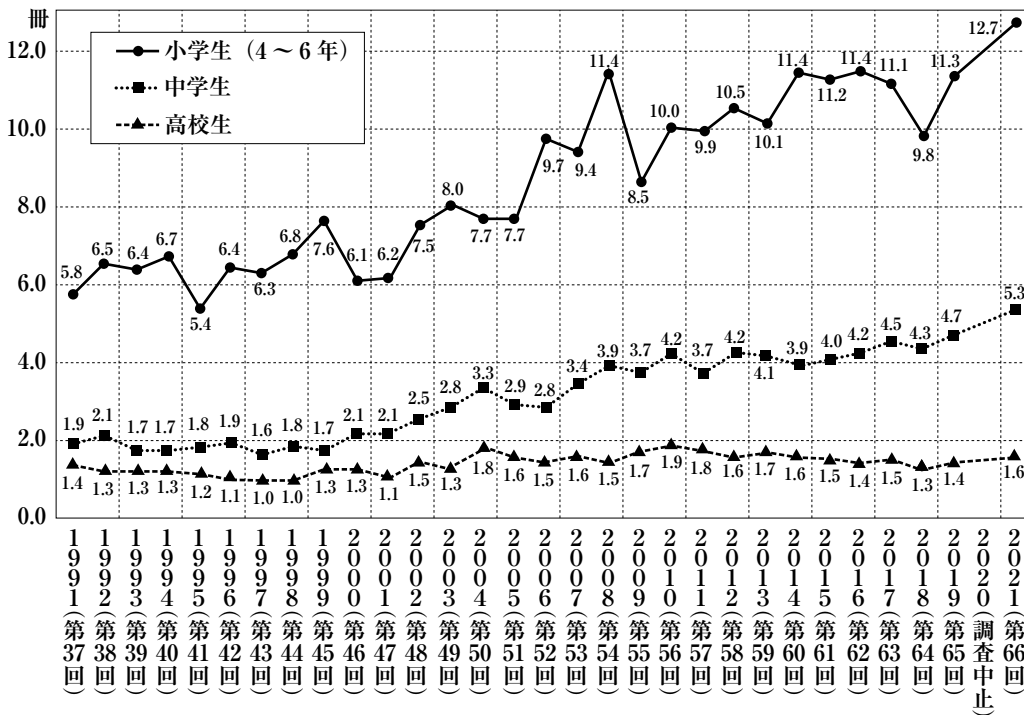
問一 次の1～5の傍線部の漢字の読みがなを答えなさい。

- 1 美しい音楽に陶酔する。
 - 2 返事を促す。
 - 3 帆船で旅をする。
 - 4 雑誌の最新号に掲載された論文。
 - 5 申し出を快く承諾する。
- 問二 次の1～5の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。
- 1 壁に有名な画家の絵をかける。
 - 2 高価なシンジュのネックレス。
 - 3 展覧会でカサクに入賞した。
 - 4 農作物をシュウカクする。
 - 5 忍耐力をツチカウ。

二 次の「第六十六回学校読書調査」の結果概要を表したグラフに関する問に答えなさい。

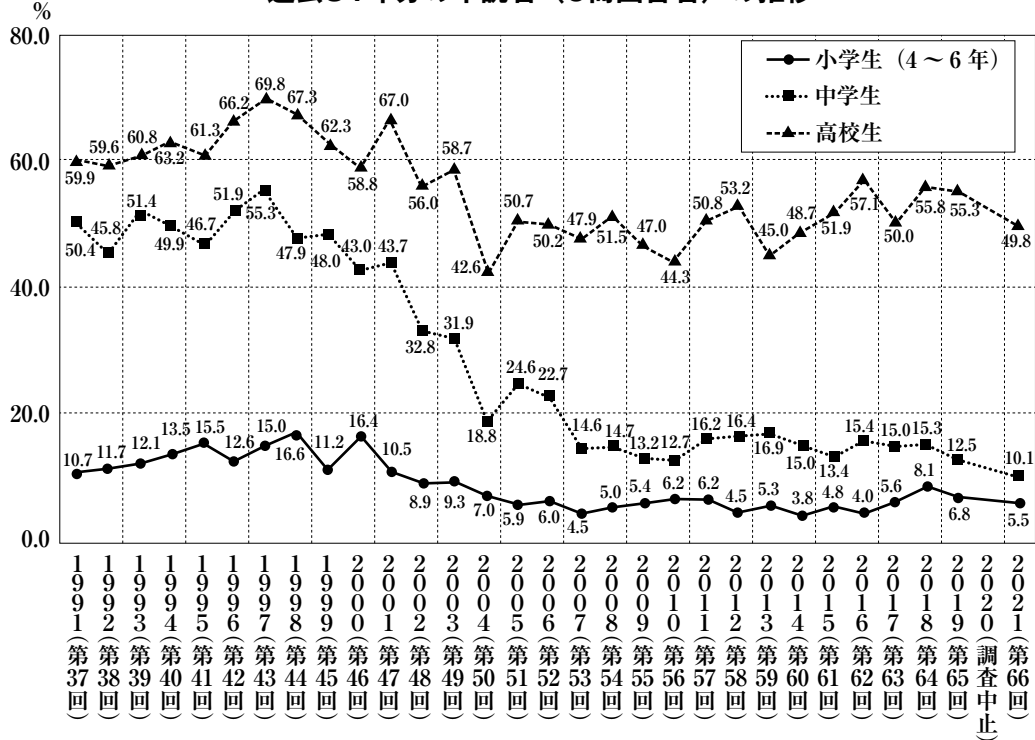
グラフ I

過去31年分の5月1か月間の平均読書冊数の推移



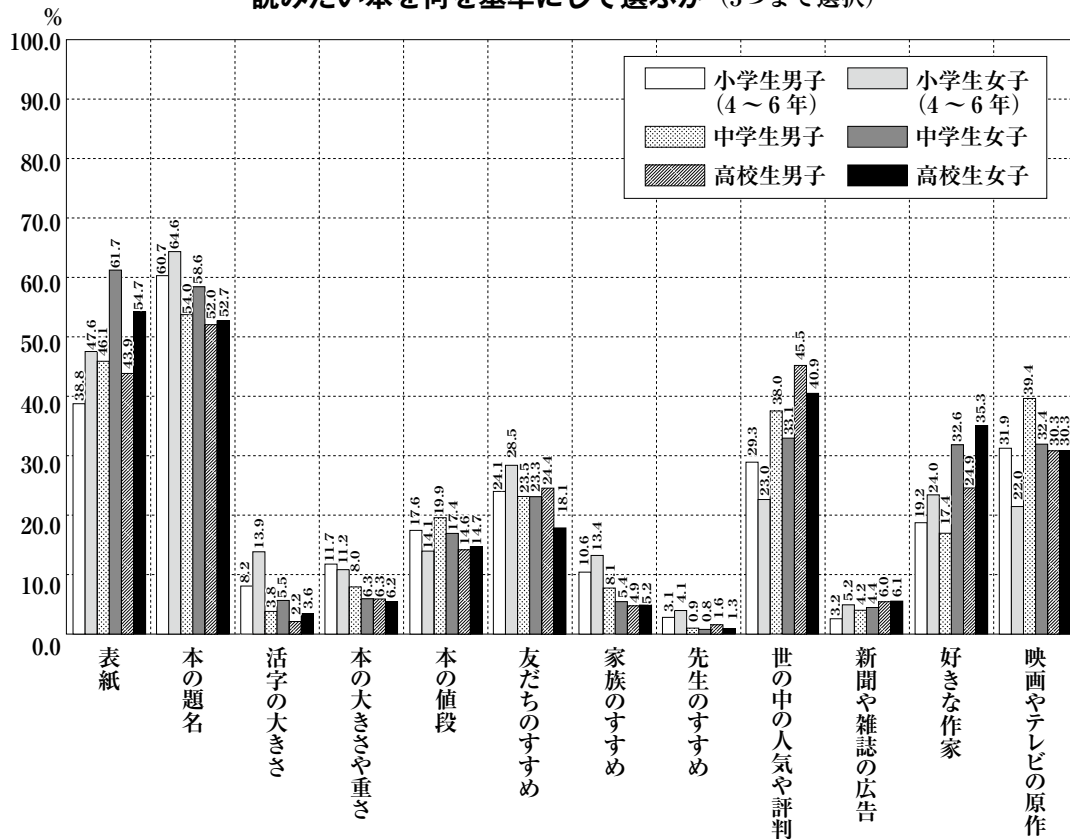
全国学校図書館協議会『学校図書館』第853号(2021年11月号)より

過去31年分の不読者（0冊回答者）の推移



全国学校図書館協議会『学校図書館』第853号（2021年11月号）より

読みたい本を何を基準にして選ぶか（3つまで選択）



全国学校図書館協議会『学校図書館』第853号（2021年11月号）より

問一 グラフⅠ・Ⅱから読み取れることとして適当でないものを、次のア～オより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 中学生の不読者数の割合は、一九九一年と二〇二一年を比較すると、約五分の一に減少している。

イ 二〇一八年以降、小学生、中学生、高校生とも平均読書冊数は年々増える傾向にある。

ウ 中学生の平均読書冊数が、最初に高校生の平均読書冊数の三倍になったのは、二〇一六年である。

エ 二〇二一年には、小学生、中学生、高校生とも平均読書冊数は最も多くなっている。

オ 高校生の平均読書冊数が前年と比較して最も増えた二〇〇四年には、不読者数の割合も最も低くなっている。

問二 グラフⅢから読み取れることとして適当なものを、次のア～オよりすべて選び、記号で答えなさい。

ア 「友だちのすすめ」は小学生、中学生、高校生すべてで女子の方が多。

イ 「活字の大きさ」「本の大きさや重さ」を本を選ぶ時の基準として最も考慮するのは小学生である。

ウ 男女を比較すると「好きな作家」の本を選ぶのは男子の方が多。

エ 高校生女子が「本の題名」を基準にする割合は「本の大きさや重さ」の8.5倍である。

オ 高校生男子が本を選ぶ基準として三番目に多いのは「表紙」である。

問三 次の会話はグラフィ・Ⅱ・Ⅲをテーマに教師と生徒が話し合い

をした内容です。空欄①～⑤に当てはまる語として適当なものを語群から一つずつ選び、記号で答えなさい。

語群

ア 学校に通えない期間があったため、自分で勉強する必要に迫られ

イ 屋外での活動が制限されたことにより、家で過ごす時間が増え

ウ 『本の値段』

エ 『新聞や雑誌の広告』

オ 『先生のすすめ』

カ 対話による本の紹介

キ 人からのすすめ

ク 新聞・雑誌による情報

ケ 平均読書冊数

コ 不読者の割合

教師 「グラフィ・Ⅱ・Ⅲそれぞれの情報から、その関連性や

推測できることを話し合ってみよう。」

生徒 A 「グラフィとグラフⅡから、二〇一九年以降、①

が減少して②が増加する傾向にあることがわかります。これは、コロナ禍で③読書する時間のゆとりが生まれたことが考えられます。」

生徒 B 「読みたい本を選ぶ基準として高学年になるにしたがつ

て『友だちのすすめ』『家族のすすめ』『先生のすすめ』のように④がだんだん減少していることから、年齢が上がるにつれて、より自分にあった読書を求めるようになってきているのではないかと思います。」

生徒 C 「読みたい本を選ぶ基準として⑤が少ないのは、

近年のインターネットの普及により、情報の収集の方法として紙媒体のものから電子機器を活用したものに變化してきているためではないかと考えられます。」

教師 「そうですね。スマートフォンの普及の影響による読書の

減少も懸念されますが、情報収集の手段として上手に使うことによって、より自分にあった読書体験ができるようにしていきたいですね。」

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

数千年という永遠のように聞こえるかもしれないが、進化の見地から見れば一瞬のようなものだ。その結果、私たちは今とは異なった環境に適応するよう進化してしまい、今生きている時代には合っていない。その影響がどんなものなのか、それを理解するために、思考、感情、経験をすべて司るあの器官、つまり人間の脳をもっと詳しく見てみよう。

生まれて初めて息を吸ってから、人生最後の吐息の瞬間まで、あなたの脳はたったひとつの問いに答えようとしている。それは「今、どうすればいい？」という問いだ。脳は昨日起きたことなんて少しも気にしていない。すべては現在と未来のため。たった今置かれている状況を判断するために記憶を活用し、感情を元にして正しい方向に自分を動かそうとする。A、ここでいう正しい方向とは、精神状態が良くなったり、キャリアアップしたり、健康を維持したりすることではない。祖先がやったように、生き延び、遺伝子を残すという方向だ。

感情というのは「自分を取り巻く環境への感想」ではない。周りでは何が起こっているかに応じて、身体の中で起きる現象を脳が反応としてまとめたものだ。それが、私たちを様々な行動に出させる。奇妙に思えるだろうか。では、最初から見えていこう。誰だって自分の感情を理解し、制御したい。調子が悪いときは特にそう思う。そのためには、^①感情とはいったい何なのか、なぜ人間に感情があるのかを理解する必要がある。感情には、精神を充実させるよりも相当重要な機能があるのだ。

他の種と同様に、人間の身体と脳を形成してきた唯一の基本ルールは

「生き延びて、遺伝子を残す」ことだ。進化は、異なる戦略をいくつも試してきた。B「できるだけ俊敏になって敵から逃げる」もしくは「景色に溶け込み見つからないようにする」。「他の種には取れないような餌を取れるようにする」というものもある。長い首のおかげで、キリンは他の動物には届かない葉を食べることができた。また別の戦略に、これは人類の場合だが、「生き延びられるよう行動させる」がある。

C 感情というものはもともと、キリンの長い首やシロクマの白い毛皮と同じように、生き延びるための戦略だった。身体的な特質を獲得するだけではなく、素早く柔軟に、全力で行動に出られるように進化したのだ。

人間のあらゆる活動は——顎を掻くこと^②から、原子爆弾を爆発させることまで——たったひとつの欲求の結果だ。その欲求とは、胸の内の精神状態を変えたい、というもの。そこを出発点にして、私たちは感情に支配される。脅かされると、怯えるか怒るか、逃げるか攻撃に出るかだ。身体にエネルギーが足りなくなると、お腹が空き、食べ物を探そうとする。

ここが X な世界で、その人が直面する選択肢の情報をすべて得ることができるとしよう。サンドイッチを食べようかどうか悩んでいる人は、栄養素、味、パンが焼き立てかどうかをちゃんと把握している。今自分の身体に栄養を補給しなければいけないこと、それにはサンドイッチが最適だというのもわかっている。そういった情報をすべてまとめ、サンドイッチを食べるか否かを合理的に決定することができる。もし私たちの祖先がこんな「X な世界」に暮らしていて、蜂蜜が

たつぷり詰まったハチの巣の前に立つたら、蜂蜜が秘める危険性と可能性についてあらゆる情報を手に入れられたわけだ。その巣に入っている蜂蜜の量とカロリー、自分の貯蔵エネルギーがいまどれくらい残っているのか。巣から蜂蜜を奪うために、負傷する危険性はどのくらいあるか。ハチ以外に危ないものはないか？ 簡単にすべての情報をまとめ、蜂蜜を取るべきか否かを合理的に決定することができる。問題は、祖先がいたのはそんな X な世界ではなかったし、私たちがいる世界もそうではないことだ。

ここで感情が登場する。私たちに様々な行動を取らせ、瞬時に全力で行動に出られるようにするのが感情だ。意識ある「あなた」が十分な情報を持ち合わせていない場合、もしくは決断に時間がかかりすぎる場合、脳は即座に大まかな見積もりを取り、感情という形で回答を返してくれる。「すぐお腹が空いた、だからサンドイッチを食べよう」あなたの祖先も同じように、空腹を感じて蜂蜜を取ったのだ。それで大変な目に遭う可能性は低いと判断した場合、もしくは究極に飢えていた場合は、危険が大きすぎると判断すれば、恐怖を感じてやめておく。

スーパーのお菓子売り場の前に立つと、餓死を回避すべく進化したアログリズムが素早く見積もりを取り、私たちに答えを与えてくれる。「お菓子が食べたい！」そんな ③ 激しい欲求という形で、食べ物が溢れるほどある現実には、脳は追いついていない。だからお菓子の棚の前に立つと、多くの人は合理的な判断を下せなくなる。私たちがカロリーを欲しがると、マリアの子孫である可能性は非常に高い。餓死したほうのカーリンではなくて。

こんなふうに、感情は良くも悪くも人間に様々な判断をさせる。ところで、それは独立した現象ではない。感情が湧くことで、身体と脳に連鎖反応が起こり、それが各器官の動きに影響するだけでなく、思考の ④ プロセスや、周囲をどう解釈するかにも影響してくる。

恐怖を感じた瞬間に、脳はコルチゾールとアドレナリンを放出する指令を出す。心臓が速く強く打ち始め、筋肉に血液が送り出される。逃げにしても、攻撃に出るにしても、最大限に力を発揮できるようにだ。お腹が空いているときに食べ物を見ると、脳がドーパミンを放出し、食べたという欲求を促す。ドーパミンはオキシトシンと同様に、性的に興奮するときにも放出され、他人との絆 （絆） も感じさせる。そのおかげで、テレビ画面ではなく隣にいる人に集中できるので。

⑤ ネガティブな感情はポジティブな感情に勝る。人類の歴史の中で、負の感情は脅威に結びつくことが多かった。そして脅威には即座に対処しなければいけない。食べたり飲んだり、眠ったり交尾したりは先延ばしにできるが、脅威への対処は先延ばしにできない。強いストレスや心配事があると、それ以外のことを考えられなくなるのはこれが原因だ。私たちの祖先は、明るい希望よりも脅威の方がはるかに多い環境に生きていた。負の感情を頻繁に感じるのは、ほとんどの言語で負の感情を表す言葉の方が多数あることから見取れる。そもそも、普通の人は負の感情のほうはずっと気になる。争いや修羅場のない映画や小説を読みたい人なんているだろうか。

負の感情の根源はストレスだ。ということで、次の章では「ストレスとはいったい何なのか」を詳しく見ていくことにしよう。

問一 空欄A、Cに入る適当な語を、次のア、イ、ウよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 例えば イ また ウ だが
エ つまり オ そして

問二 —— 線①「感情とはいったい何なのか」とありますが、「感情」とはどういうものであると筆者は述べていますか。「も」の。」に続くように本文中から二十字以内で二つ抜き出し、それぞれ最初の五字を答えなさい。

問三 —— 線②「感情に支配される」とありますが「感情に支配され」たときに出る行動として適当なものを、次のア、イよりすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 階段で足を踏み外したときに、とっさに手を出し手すりにつかまる。
イ 檻かごから抜け出したライオンに襲われそうになったとき、反撃に出ようとする。

ウ 信号無視をした車に轢ひかれそうになったとき、思わず目をつむる。

エ 大型台風が接近したときに、危険だから家からは一歩も外に出ない。

オ 仕事でミスをしたときに、気分転換に旅行に出かける。

問四 三つの空欄Xに共通して入る語句として最も適当なものを、次のア、イより選び、記号で答えなさい。

- ア 不都合 イ 危険 ウ 広大
エ 完璧 オ 単純

問五 —— 線③「激しい欲求」を言い換えた部分を二十字程度で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六 —— 線④「プロセス」の意味として最も適当なものを、次のア、イより選び、記号で答えなさい。

- ア 冒険 イ 方針 ウ 優先
エ 過程 オ 放棄

問七 —— 線⑤「ネガティブな感情はポジティブな感情に勝る」とありますが、その理由を五十字以内で述べなさい。

問八 本文の内容に合致するものを、次のア～オよりすべて選び、記号で答えなさい。

ア 感情を理解するためには、今の時代にそぐわない進化をした脳のことを詳しく知る必要がある。

イ 脳は感情を元にして、精神状態を回復するなどの正しい方向に自分を動かそうとする。

ウ 合理的な判断ができる状況下において、人は感情を特別必要とすることはない。

エ 人は感情がこみ上げてくることで、これまでには見られなかった新たな力に目覚める。

オ たいいていの人、ポジティブな感情をあまり気にすることなく生きている。

四 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「優太（ほく）」の住む地域は、近くの町と合併することになり、それを記念してトライアスロン大会を開催する。同じ中学に通うスィムの「姫」、バイクの「モー次郎」とリレー部門で参加するが、「優太」は実際のコースを「鶴じい」と一緒に全部回ろうとしている。

ふたたび桜浜の海岸線に戻ってくる。視界いっぱいには太平洋が広がった。さわやかな海の青が目染みる。沖の光のきらめきが疲れを忘れさせてくれる。モー次郎も[※]ツイン・テイルズと勝負しているあいだ、桜浜の海を眺めて同じ気持ちになっただろうか。

八キロのバイクパートが終わる。ロードバイクをウミガメさんの海の家に預けて走り出す。いよいよ最後のランパートだ。これから五キロ走らなくてはならない。ちょっとばかり気が遠くなる。

「大丈夫かい」
待っていてくれた鶴じいと言う。いったい何度目の「大丈夫かい」だろう。

「なんとか」
「ここからは優太くん担当のランパートだからね。気合を入れていこう」

太陽が雲間から顔を出した。アスファルトが白く輝く。気温が急に上がった。もう汗だくでシャツもパンツもびしょびしょの状態だ。体が鉛でできているかのように重い。地面に座って休みたいが一度休んでし

まったら、きつともう立ち上がれない。歯を食いしばって走るしかなかった。

必死に走りながら、ひとつ気がついた。ツイン・テイルズの三人は、スィムの五百メートル、バイクの八キロ、ランの五キロを、きちんと完走したあと笑いながら帰っていった。あいつらはすごい。同い年なのにすごい体力をしている。へア

「優太くん、ファイト！」
鶴じいが励ましの声をかけてくれる。ほくにはもう返事をする余力もない。無言で走り続けた。へイ

折り返し地点の南郷町との町境まであと少しというときのことだ。まづいな、という予感がまずあった。そのあとすぐに左足のふくらはぎがつた。激痛が走った。へウ

「ひええ！ い、いてえ！」
よちよちと何歩か進んだあと、アスファルトに尻もちをついた。痛みで空を仰ぐ。汗がいつきに二倍くらい出た。急いで戻ってきた鶴じいが足をマッサージしてくれた。

「足がつったか。もうここまでにしよう」
鶴じいは神妙な顔つきで言う。でも、ほくは叫んだ。へエ

「いやだ！」
「なんでだい」
問いかけに答えずに、うつむいてアスファルトを睨んだ。へオ

姫や美月の[※]抱えている悲しみや苦しみを知ってから、ずっと考えていることがある。幼くて、無力なほくらは、どうにもできない問題にぶ

ち当たったとき、いったいどうしたらいいのか。いったいどうすれば無力なぼくらから変われるのか。強く変われるとするならば、なにに對してどう強くなればいいのか。

はつきりとした答えはまだ見えてこない。けれど、ぼくたちの周りにながらぎ起きているのかは、少しずつ見えてきた。

(中略)

ぼくらはどつかで、弱くて歪ゆがんでしまった大人たちのその歪みを、押しつけられているのだ。そういう世界構造というかシステムのいちばん下にぼくらはいる。

世の中じゃぼくらと同じ年のやつらが、ナイフで友だちを刺したり、バットで親を襲ったりする事件が起きている。大人たちはみんなぼくらに心の闇があつて、病んでいるのだと口にする。

けど、そんなんじゃない。ぼくたちは病んでなんかいない。大人たちに押しつけられた歪みに耐えられないやつが出てきているだけだ。心の闇なんてない。ぼくたちはあと少し考える力が必要なだけだ。言っていることとやっつてることがちがうじゃやない憧あこがれたくなるような大人に、そばで導いてもらえればきつと変わる。

ただ、ぼくらなにもしないではうつつとしているだけじゃ駄目だ。生きにくい、生きにくい、なんて弱さに取り込まれないように、もっと強くなるなくちゃいけない。だるいとか、面倒くさいとか、人の話を聞きたくないとか、自分だけよけりやそれでいいとか、自分のつらさや苦しさにばかり詳しくなつたつて、なんにも変わらない。*タカオさんが閉じこもっているような闇に包まれて、同じように膝を抱えて座っていた

ら、歪みを押しつけられたぼくらは、本当に歪んで立ち上がれなくなる。大切なのはイメージだ。もっと高くジャンプして、青い空に手を伸ばすようにして、歪んだ大人たちがつかめなかつた生きるつてことの楽しさを、ぼくらの世代が手にするのだ。

そのための強さを手に入れるためには、足を踏み出さなくちゃいけない。それは大袈裟おおげさな話ではなくて、きつと身近な一歩であつてもいい。たとえば、ぼくの場合、X こと。なにかをやり遂げること身につく強さを、ぼくはいま手にすることがきつとできる。それがいつか大人の歪みをはね返す強さになる。友だちを救う力になる。

「鶴じい。残りは二・五キロくらいだよね」

「おお。そうじゃな」

「足をマッサージして治してよ」

「だがな……」

「あとちょっと休めば大丈夫だから」

強く言うと、鶴じいはしばしば顔を見つめていたが、大きく頷うなづいた。

ゆっくりと立ち上がつてみた。屈伸してから足をぶらぶらさせてみる。大丈夫だ。鶴じいのマッサージはとても上手だった。

「大丈夫みたいです。行きましょう」

鶴じいに笑いかけて、ぼくから先に走り出した。ゆっくりだけれど、絶対にゴールしてみせる。

体が疲れきつていて Y する。視界も Z 揺れている。聞

こえてくるのは自分の乱れた呼吸と、のろのろした足音と、遠い波の音

ただだ。必死に走っていると、考えることもどんどん単純になっていく。心の中で何度もくり返す。

「自分に負けない、自分に負けない」

単純になっていく自分がなぜかとても好きだ。気のせいだろうか。自分の魂が美しくなっていくような感覚がある。海や空や山がきらきらと輝いて見える。ぼくを見守ってくれているようでおしい。

ゴール地点が見えてきた。あと百メートル、あと十メートル、あと一メートル。近づくにつれて、自分に負けない、という気持ちさえ体の中に溶けて消えていった。ぼくは空っぽになって、ゴールを走り抜けた。

鶴じいがうれしそうに肩をたたいてくる。

「お疲れ。急に止まらないで、もう少し歩いてね」

ぼくは桜浜の海を眺めながら惰性でとぼと歩いた。しばらく歩いたあと、アスファルトに腰を下ろす。疲れて、すぐにでも眠ってしまいうだった。

「どうだった？ 初めてのトライアスロンの感想は」

そばにやってきた鶴じいが訊いてくる。

「疲れました」

鶴じいが笑う。

とにかく疲れた。でも、体がびりびりと震えるような達成感がある。

心と体がいつせいに、充実してるぜ、と声をあげている。

「自信はついたかい」

「え？」

突然、思いもしなかったことを尋ねられて、首をかしげてしまった。

「優太くんは言っていたじゃないか。わしが八十歳になったってアイアンマンレースに出るって言ったら、すごいですねって。そういうがんばれる自信とかないですよって。だが、今日走り終えて自信ついたんじゃないの？」

ぼくは思いつきり頷いた。

「自信がきました」

鶴じいが、ぼくらを導いてくれるかっこいい大人のひとりだと、いまやっと気づいた。気づいてうれしくなった。

以前、鶴じいが話していたことについて尋ねてみたくなった。

「姫とモー次郎とぼくの三人の中で、ぼくがいちばん練習を見る必要があるって言ってましたよね」

「言ったよ」

「走り方を直せば、[※]加倉井といい勝負ができるようになるって言ってましたよね」

「言ったとも」

「あれってどういう意味なんですか」

① 鶴じいはにやりと笑った。

「優太くんは体のどこかを故障したことがあるだろう」

「わかるんですか」

「ランニングフォームが、体のどこかを変にかばうふうに見えたんだよ」

「実は、前に左膝を」

「やっぱりね。左足の足首が開いたまま着地しているように見えたからね。もう完治はしてるのかい」

「はい」

「じゃあ、これからは、きちんとしたランニングフォームで走るように心がけよう。フォームはわしがチェックしてあげるから。練習メニューも作らなくてほね」

「ありがとうございます」

お礼を言うと、鶴じいは本当にうれしそうに笑った。

「それにしても、膝はどうして悪くしてしまったんだい」

いやな記憶がよみがえってきて、ぼくは浮かべていた笑みを引っ込めてしまった。話すべきか迷ったが、鶴じいになら話してもいいように思えて、ゆっくりと話して聞かせた。中学が上がってから急にサッカーが下手になったこと、ボールタッチの感覚がズレてうまくいかなかったこと、無理をしてドリブルやフェイントの練習をしていたら膝を痛めてしまったこと、そして、逃げるようにしてサッカー部をやめてしまったことまで、^② 悲しかった気持ちも全部話した。

「それはクラムジーだね」

話し終えると、怪獣の名前のような言葉を鶴じいがつぶやいた。

「クラムジー？」

「サッカーが下手になるちょっと前に、急に身長が伸びなかったかい」

「伸びました。ものすごく」

「うん。クラムジーだ」

鶴じいは確信したらしい。説明してくれた。

「体が成長期を迎えて、筋肉や骨格が急激に成長すると、体のバランスが変わってくるんだよ。テコで言うところの支点や力点や作用点という

やつが変わってしまうんだ。だから、いままでできたテクニックができなくなるし、新しいテクニクも習得できなくなる。この時期をクラムジーと呼ぶんだよ。英語で、不器用な、とか、ぎこちない、という意味さ」
初耳だった。

「わしもトライアスロンをやるようになってから、それなりにスポーツ科学に詳しくなったからね」

いくら練習してもボールコントロールがうまくならなかったり、やけにボールタッチに違和感を覚えたりした原因は、クラムジーのせいだったのか。

あのころ感じた言葉にできない奇妙で微妙な感覚のズレを、きちんと説明してくれた鶴じいがまぶしく見える。^③ 心から尊敬する。

「優太くんは短期間でもものすごく身長が伸びたんだろ。それだけクラムジーの徴候は顕著に現れたと思うんだよ。それから、クラムジーだといふのに無理して練習したのはまずかったな。優秀なコーチがいるサッカークラブでは、その時期は無茶な練習はさせないものなんだよ。膝などの関節に無理な負荷がかかれば、故障してしまうのは当たり前だからね」

「サッカー部のみんなに負けたくなかったし、みんな敵に見えてきちゃってて、練習をやめられなかったんですよ。なんかすんげえ不安だったんです」

「クラムジーという時期はホルモンのバランスも変わり始めるために、情緒不安定になったりもするらしいのだよ」

そうだったのか。なんだか、目からウロコという感じがした。

「また、サッカーがうまくなれますか」

「それは優太くんの努力次第だよ。もう優太くんも成長した自分の体に慣れたところだろうから、以前のようなボールを蹴ったときの違和感はなくなつてると思うけれどね」

ぼくは自然と微笑み返していた。

(関口尚 『空をつかむまで』より)

※ツイン・テイルズ……ライバルのチーム。

※美月……「優太」の幼なじみ。「姫」モータ次郎」も含め、それぞれ悩みがある。

※タカオ……「姫」の父親。

※加倉井……ツイン・テイルズのリーダー。

問一 次の一文は、本文のヘア～ヘオ～のどこに入りますか。

ア～オの記号で答えなさい。

それが答えだと思つてほしかった。

問二 空欄Xに入る文脈に即した言葉を、十五字程度で答えなさい。

問三 空欄Y・Zに入る組み合わせとして最も適当なものを、次の

ア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア Y くらくら | Z くるくる
イ Y だらだら | Z ぐるぐる
ウ Y からから | Z ふるふる
エ Y ふらふら | Z ゆらゆら
オ Y よろよろ | Z がんがん

問四 ——線①「鶴じいはにやりと笑った」とありますが、その理

由を六十字以内で説明しなさい。

問五 ——線②「悲しかった気持ち」とありますが、その原因を

「クラムジー」の状態を踏まえて、本文中より五字以内で抜き出しなさい。

問六 —— 線③「心から尊敬する」とありますが、「優太」が「鶴

じい」を尊敬する理由を説明した文として最も適当なものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 「優太」が走り続けたランパートのコースの完走を笑顔で見守り、温かくゴールを受け入れてくれた上で、サッカーを続けられなかった時のことを慰めてくれたから。

イ 「優太」がランパートのコースを最後まで走り続けられるように励ましながら伴走し、自信を持たせた上で、サッカーを続けられなかった時のことを説明してくれたから。

ウ 「鶴じい」は「優太」がやっと走り切ることが出来たコースを、余裕をもってゴールした上で、自分がサッカーをやめた過去のつらさを受け入れてくれたから。

エ 「鶴じい」は「優太」が一生懸命走りきったことを心から祝福してくれた上で、本当はサッカー選手として戻りたい「優太」の気持ちを後押ししてくれたから。

オ 「鶴じい」は「優太」が全力で走り切れたことを誇らしく思ってくれて、これならサッカー選手としてもやっていけると過去の経験を踏まえて励ましてくれたから。

問七 本文の表現・構成を説明したものとして適当なものを、次の

ア～オより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 広大な海や空の景色は、「優太」の性格や気持ちと対照的である一方で、登場人物を暖かく包みこんでいる様子が描かれている。

イ 「惰性でとぼとぼ歩いた」「体がびりびりと震える」には擬音語が用いられ、「優太」の感覚を表面化している。

ウ 「優太」の「鶴じい」に対する話し方の変化は、「優太」の二面性がある性格の表れとして、象徴的なものである。

エ 一文が短い文体は、「優太」の内面の変化や前向きな気持ちを、主観的な視点から歯切れよく表現している。

オ ランパートは「優太」の人生そのものが印象的に描かれており、山あり谷ありのコースは、まさに「優太」のこれからの人生を決定づけている。

問八 本文の今後の展開として考えられるものを、次のア～オより

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歪んだ構造や大人たちの弱さに耐え切れない「優太」であったが、「鶴じい」だけは頼りにして走りを続けていった。

イ 「鶴じい」のランの指導力を心から尊敬した「優太」は、スイムとバイクも教わり、一月後に一人で大会に出ようとした。

ウ 「鶴じい」から感動するほどの助言を受けた「優太」は、高校では自信を持ってサッカー部に所属することにした。

エ 「鶴じい」とのやり取りを通して自信がついた「優太」は、大会には出ずにサッカー部に復帰することにした。

オ サッカーの才能に目覚めた「優太」だが、「鶴じい」にトライアスロンで頑張るように言われ、サッカー選手の道をあきらめた。